

日本在住ベトナム人日本語学習者の聞き返しに関する研究：使用に影響を与える要因の解明

ドー ビッ ゴック

<https://hdl.handle.net/2324/7363902>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（学術）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	DO BICH NGOC			
論 文 名	日本在住ベトナム人日本語学習者の聞き返しに関する研究 ー使用に影響を与える要因の解明ー			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松永 典子
	副 査	九州大学	教授	郭 俊海
	副 査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副 査	九州大学	教授	大神 智春
	副 査	ハロン大学	講師	THAN THI MY BINH

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、従来、日本語学習者の聴解問題の解決という観点から行われたきた聞き返しを、その使用に影響を与える要因の解明を通して、日本語母語話者とのインタラクティブな会話方略という観点から捉え直そうとする実証的な研究である。

聞き返しを日本語学習者の聴解能力の問題と捉える観点から行われてきた方略研究においては、日本語学習者側の横断的データによる分析にとどまり、日本語能力以外の要因が聞き返しに与える具体的な影響についての解明が進んでこなかった。加えて、聴解能力に問題があると指摘されてきたベトナム人を対象とした聞き返し研究はほとんどなされていない。こうした研究の空白を補うべく、本研究は、初来日のベトナム人日本語学習者 4 名を対象に、日本語母語話者との接触場面における自然発話データをもとに、聞き返しの使用実態とその影響要因を縦断的に解明することを研究の目的としている。

以上を踏まえ、設定された研究課題は 3 つある。1 つ目の課題は、来日前のベトナム人日本語学習者は、どのような聞き返しストラテジーを使用するのか、2 つ目の課題は、来日後のベトナム人日本語学習者は、どのような聞き返しストラテジーを使用するのか、3 つ目の課題は、ベトナム人日本語学習者が使用する聞き返しストラテジーに影響を与える要因は何か、である。

この解明において、聞き返しを母語話者とのインタラクティブな会話方略であると捉え、第二言語社会化論（相手との相互作用を通じて言語、文化、コミュニケーション能力の上達を理解するための理論的枠組み）を用いた分析・考察を行っている。

本研究は 6 章により構成されている。第 1 章では、ベトナム人日本語学習者の現状を背景として概観し、本研究の目的、意義、用語定義などを述べた。第 2 章では、先行研究について概観し、研究課題の抽出を行った。第 3 章では、本研究で使用する理論的枠組みと研究方法について記載した。第 4 章では、1 つ目と 2 つ目の研究課題に関する調査と分析の結果を示した。第 5 章では、3 つ目の研究課題に関する調査と分析の結果を記述した。第 6 章では、得られた結果を基に、本研究の総合的考察、結論、および意義をまとめた。

まず、来日前と来日後の聞き返し使用ストラテジーの解明という課題に対しては、ベトナム人日本語学習者 4 名と日本語母語話者 4 名の自然発話データを用い、聞き返しの使用回数と頻度を分析した。その結果、来日前は聞き返しの頻度が高かったが、来日後 3 ヶ月で一時的に減少し、その後再び増加する傾向が確認された。また、本研究で「単純エコー型（説明）」と名付けた聞き返しは、

先行研究では相手に説明を要求する意図が伝わりにくく、聞き返しとして認められていなかった。しかし、本研究では、この聞き返しが聴解問題を解決するために有効な方略として成功していることが確認されている。さらに、初級学習者が多用する「分かりません」「知りません」といった表現に関して、本研究では、中級レベルの対象者が丁寧語や理解できない部分を付加する形で、聞き返しとして使用している現象も観察された。また、質的調査からは、来日前は聞き返しを躊躇していたが、来日後は能動的に聞き返しを行い、その結果、会話内容の深掘りや「言い換え型」の聞き返しが増加したことが明らかになった。特に、緊急時や困難な状況では第三者に助けを求め、問題を解決しようとする姿勢が顕著に確認された。ここでは、会話における困難を解決する過程は日本語学習者が日本社会の新しい価値観や規範を学ぶプロセス、つまり社会的・文化的学習の場として捉えられ、聞き返しが日本語学習者の社会化のための学習方略としても機能していることが指摘されている。

ベトナム人日本語学習者が使用する聞き返しストラテジーに影響を与える要因の解明という課題に対しては、影響要因に焦点を当てた分析を行った。その結果、会話相手、話題、学習環境、ピア・プレッシャー、時間の制限といった外的要因によって聞き返しの方略が変わるという結果が得られた。また、上記の外的要因に加えて、自己調整学習、学習意欲、日本語能力、個人の性格、感覚的な判断、自信の有無、積極性の高まりといった内的要因が聞き返しの使用の有無や頻度、種類などに影響を与えたことが確認されている。このうち、外的要因として確認された学習環境、ピア・プレッシャー、時間の制限、内的要因として確認された自己調整学習、学習意欲、感覚的な判断、自信の有無、積極性の高まりは、本研究により初めて提示されたものである。

つまり、聞き返しの使用に影響を与える要因のうち、聞き返しの使用が多次元的な要因に影響されているというこの知見は、聞き返し研究における理論的枠組みを拡張させる可能性がある。加えて、聞き返しが単に日本語学習者の聴解問題を解決する手段に留まらず、会話参加者にとって会話を継続させ、発展させるための重要な相互方略であり、緊急時や困難な状況を通して、日本語学習者が日本社会に適応していくための学習方略としても機能することが明らかになった。

以上のように、本研究の新規性は、縦断的な調査により外的要因が日本語学習者の聞き返しの方略の変化に影響を与えること、日本語能力以外の様々な内的要因が聞き返しの使用の有無や頻度、種類などに影響を与えたことを実証的に示した点にある。加えて、従来、聴解能力に問題があると指摘されてきたベトナム人の聞き返しを、会話参加者間のインタラクティブな会話方略として捉え直すことにより、日本語学習者の社会化の方略という観点を加え、再定義した点にある。つまり、聞き返しは、日本語学習者の聴解問題解決の手段、会話参加者の会話を円滑化するための相互方略であることに加え、緊急時や困難な状況を通して日本語学習者が日本社会での社会的・文化的適応を果たしていくための学習方略であることを明らかにした。これらの点は、今後、さらに検証を要する側面はあるものの、従来、学習者側の問題として扱われてきた聞き返しを社会化のための学習方略として再定義した点、多次元的な要因の存在を確認し、その影響により聞き返しの方略が変わることを指摘した点は極めて独自性が高い。その意味において、聞き返し研究に新たな視角や知見を提供するものであり、方略研究の理論的枠組みの拡張に繋がる可能性を示唆している。以上の点により、本研究は極めて独自性が高く、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断する。